

## 対人恐怖心性 – 自己愛傾向 2次元モデル尺度における短縮版作成の試み

清水 健 司

広島国際大学大学院総合人間科学研究科  
日本学術振興会特別研究員

川 邊 浩 史

老人保健施設コスモス園

海 塚 敏 郎

広島国際大学心理科学部

### 目 的

現在、対人恐怖と自己愛の関係性には一様でない複雑性が存在している。しかし、本現象を詳細に検討することは対象となる青年期の生き方における重要な意味を提示できる可能性を持つものである。

岡野 (1998) は対人恐怖と自己愛の関係を、「恥に対する敏感さ」と「自己顕示欲の強さ」に準えた2つの独立変数で扱う必要性を論じ、両概念を横・縦軸にとった関係性から4つのタイプを想定している。これは現在も議論が続く Gabbard (1989) の自己愛における傍若無人で自己顕示欲のみが強い「無関心型」自己愛人格と自己顕示欲の強さと他者評価に過敏で対人恐怖的な面を併せ持つ「過敏型」自己愛人格の2タイプの存在理解にも資するものである。

最近では、この岡野 (1998) が提示した対人恐怖と自己愛の臨床理論の拡充から、健常青年においても同様に2つの独立変数で扱うことに言及した実証的研究が散見されている。

例えば、清水・海塚 (2002) は岡野 (1998) が表現した「恥に対する敏感さ」と「自己顕示欲の強さ」を正常範囲内での対人緊張や他者回避性や敏感さを表す「対人恐怖心性」と、青年期特有の人格特徴であり正常範囲内での自信や有能感や肯定的感覚を表す「自己愛傾向」に置き換えて分析し、Gabbard (1989) や岡野 (1998) の臨床理論に類似するサブタイプを実証的方法論にて抽出している。また、小塩 (2004) においても数々の非常に有用な視点が提示されている。

このように、一見正反対に見られる対人恐怖心性と自己愛傾向が2つの独立変数として扱われる必要性から、清水・川邊・海塚 (2005) は2つを両軸に取った対人恐怖心性 – 自己愛傾向 2次元モデルを作成している (Figure 1)。これは、横軸に対人恐怖心性を、縦軸に自己愛傾向をとり、Wink (1991) や相澤 (2002) がほぼ近似する概念として前者を過敏特性、後者を誇大特性と表現したことを参考にしている。そして、各尺度の平均値から  $\pm 0.5SD$  を中間型 (4つの亜型を合わせたもの) として、あとは特性の強弱によって誇大 – 過敏特性両向型、過敏特性優位型、誇大 – 過敏特性両貧型、誇大特性優位型と分類され、青年期心性レベルでの対人恐怖と自己愛の関連について類型論的な視点を示すものであ

る。更に、清水他 (2005) はモデルの妥当性及び自意識や適応性の検討を行うことで、健常群の対人恐怖と自己愛の関連を詳細に論じるための重要な基礎部分について論じている。今後は、本モデルを使用して各類型の精神的健康に関連する要因検討を行い、認知行動論的アプローチなどへの援用を期待したアナログ研究として臨床応用の立場をとることが課題である。

しかし、類型判別には合計 60 項目と他の指標とバッテリーを組む上で対象者の負担が大きいため、本研究は対人恐怖心性 – 自己愛傾向 2次元モデルにおいて、質問事項を吟味した上で簡便に類型判別できる短縮版を作成することを目的とする。

### 方 法

#### 質問紙の構成

1. 回答者の基本的属性要因：学年・年齢・性別について記入してもらった。
2. 対人恐怖心性尺度：堀井・小川 (1997) が作成した 30 項目について“全然当てはまらない”から“非常に当てはまる”の 7段階で評定してもらった。

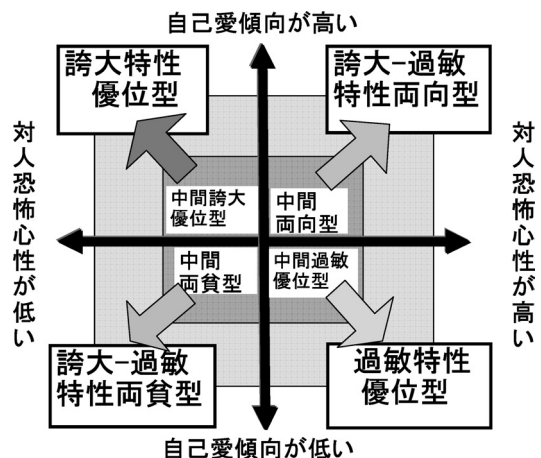


Figure 1 対人恐怖心性 – 自己愛傾向 2次元モデル

3. 自己愛人格目録短縮版(NPI-S)：小塩(2004)が作成した30項目について“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”の5段階で評定してもらった。

#### 調査対象

H県内の大学に通う大学生・専門学校生305名(男：121名, 女：184名)を対象とし, 平均年齢は19.4歳( $SD=1.40$ )であった。

#### 結果と考察

まず, 対人恐怖心性尺度の30項目に対して因子分析(主因子解-Promax回転)を行い, 固有値の減衰状況から〈集団に溶け込めない〉, 〈目が気になる〉, 〈生きることに疲れている〉, 〈自分を統制できない〉, 〈自分や他人が気になる〉の5因子を抽出し, 累積説明率は63.6%であった。また, NPI-Sも同様の手順にて〈注目・賞賛欲求〉, 〈優越感・有能感〉, 〈自己主張性〉の3因子を抽出し, 累積説明率は46.4%であった。

本研究は短縮版作成の目的から, 各因子項目の中で因子負荷量の強さ・IT分析結果・回答傾向の偏り・項目内容を考慮して必要とされる項目を選出した。また偏りを避けるため, 各因子より均等になるように, 対人恐怖心性の5因子から各々2項目(10項目), NPI-Sの3因子から各々3項目, 更に最も説明分散が大きい第1因子から追加の1項目

(10項目)の合計20項目を選出した。

そして, 確認のため, ここで選出された20項目に対して因子分析(主因子解-Promax回転)を行い(Table 1), 2因子を最適解として累積説明率は43.6%であった。因子構造は, 第1因子は対人恐怖心性尺度が, 第2因子はNPI-Sが強い因子負荷量を示しており, 概ね因子の妥当性を備えていると判断された。

また, 短縮版の $\alpha$ 係数は対人恐怖心性で.85( $M=34.7$ ,  $SD=10.4$ ), NPI-Sで.85( $M=27.1$ ,  $SD=6.8$ )であり, 各々の原版と10項目版との相関係数も.96, .93と高いことから一定の内的整合性と縮約された尺度が情報を十分反映していることが確認された。因子間相関は $r=-.22$ で, 原版の因子間相関が $r=-.28$ (清水他, 2005)と共に低い負の相関を示したことから, 短縮版においても両概念間の関係性に大きな相違はないと考えられる。そして, Table 2に各類型の男女比・人数比率・分類基準・類型特徴を示した。

また, 各類型特徴に関しては対人恐怖心性と自己愛傾向の関連を探索的方法論にて検討した清水・海塚(2002)と清水・海塚(2004)の知見を参照しながら以下に述べてゆく。

まず, 誇大特性優位型は自己愛傾向が高く, 対人恐怖心性が低い型であり, 何の気兼ねもなく自己主張ができて高い精神的健康を持つという特徴を持ち, 誇大-過敏特性両向型は対人恐怖心性, 自己愛傾向が共に高い型であり, 社

Table 1 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度(短縮版)の因子分析結果

(主因子解-Promax回転)

質問項目	Factor 1	Factor 2
AN7：自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう。	.73	.12
AN29：すぐに気持ちがくじける。	.67	-.04
AN16：人と話をするとき, 目をどこに持っていった方がいいのかわからない。	.65	.04
AN4：人と目を合わせてもらえない。	.61	.04
AN30：何をやってもうまくいかない。	.59	-.06
AN19：自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする。	.59	.10
AN15：人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない。	.57	-.14
AN12：充実して生きている感じがしない。	.56	-.06
AN2：集団の中に溶け込めない。	.55	-.12
AN11：根気がなく, 何事にも長続きしない。	.51	.06
NPI8：私は, どちらかと言えば注目される人間になりたい。	.11	.74
NPI7：私は, 周りの人たちより有能な人間であると思う。	-.02	.71
NPI4：私は, 周りの人たちより, 優れた才能を持っていると思う。	-.06	.67
NPI26：私は, 人々の話題になるような人間になりたい。	.13	.64
NPI11：私は, 才能に恵まれた人間であると思う。	-.05	.61
NPI20：機会があれば, 私は人目に付くことを進んでやってみたい。	-.02	.61
NPI29：人が私に注意を向けてくれないと落ち着かない気分になる。	.22	.60
NPI6：私は, 控えめな人間とは正反対の人間だと思う。	-.24	.45
NPI30：私は, 個性の強い人間だと思う。	-.10	.43
NPI24：私は, 自己主張が強いほうだと思う。	-.16	.40
累積説明率		43.6

AN：対人恐怖心性尺度 NPI：NPI-S

因子間相関  $r=-.22$

**Table 2** 各類型の男女比・人数比率・分類基準・類型特徴

類型	男女比 (人)	人数比率	分類基準	類型特徴
誇大特性優位型	30:53	27.1%	Fac 1<34.7 & Fac2>27.1 の範囲から 中間誇大優位型を除いたもの	自己主張性を特徴として、高い 精神的健康を持つ型
誇大 - 過敏特性両向型	27:28	18.2%	Fac1>34.7 & Fac2>27.1 の範囲から 中間両向型を除いたもの	他者の評価が気になり、慢性的な 葛藤状態にある型
過敏特性優位型	15:37	17.2%	Fac1>34.7 & Fac2<27.1 の範囲から 中間過敏優位型を除いたもの	自己肯定感覚が低く、不適応的状 態像を示す型
誇大 - 過敏特性両貧型	33:44	25.1%	Fac1<34.7 & Fac2<27.1 の範囲から 中間両貧型を除いたもの	自己の情緒状態や内的な葛藤に目 を向けることが少ない型
中間型	16:22	12.4%	Fac1=34.7±5.2 & Fac2=27.1±3.4	対人恐怖心性・自己愛傾向が共に 平均的範囲内にある型

会的場面では他者の評価を気にすることが多く、慢性的な葛藤状態にあると記述されている。

また、過敏特性優位型は対人恐怖心性が高く、自己愛傾向が低い型であり、自己に対する肯定的感覚の低さを呈し、不適応的状態像を示すという特徴を持ち、誇大 - 過敏特性両貧型は対人恐怖心性、自己愛傾向が共に低い型であり、自分自身の情緒状態や内面に目を向けることが少なく内的な葛藤をあまり感じない傾向があるとされている。

そして、中間型は対人恐怖心性、自己愛傾向が共に平均的な範囲にあり、この型の特徴に関しては多くの検討余地を残している。

本尺度は、清水他 (2005) が提案した対人恐怖心性 - 自己愛傾向 2 次元モデルの類型を簡便に分類するために開発されたものである。この分類に関しては類型論的色彩が強いものであるが、青年個人の類型を限定的・固定的に捉えるのではなく、各類型が連続線上にあり、様々なライフイベントや認知・行動特性によって類型移動が起りうるという特性論的色彩も並行しながら総合的な知見の深化を図ることが重要であると思われる。

今後は本尺度の安定性や他の心理測定尺度との併用による精練などを通して、更に各類型の特徴を検討してゆくことが課題となるであろう。

## 引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛の人格における誇大特性と過敏特性. *教育心理学研究*, **50**, 215-224.
- Gabbard, G. (1989). Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **53**, 527-532.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997). 対人恐怖心性尺度の作成 (統報) *上智大学心理学年報*, **21**, 43-51.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析——対人恐怖から差別論まで—— 岩崎学術出版社
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学. ナカニシヤ出版
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連. *教育心理学研究*, **50**, 54-64.
- 清水健司・海塚敏郎 (2004). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の基礎的研究. *広島国際大学心理臨床センター紀要*, **3**, 23-32.
- 清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2005). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について. *日本心理臨床学会第 24 回大会発表論文集*, 275.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.

— 2005. 10. 5 受稿, 2006. 4. 26 受理—

## **A Short form for the Two Dimensional Model of Social Phobic Tendency and Narcissistic Personality**

Kenji SHIMIZU<sup>1</sup>, Hirofumi KAWABE<sup>2</sup> and Toshiro KAIZUKA<sup>3</sup>

<sup>1</sup>Graduate School of Integrated Human Sciences Studies, Hiroshima International University / Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science

<sup>2</sup>Institution of Health and Welfare for Elderly, Kosumosu-en

<sup>3</sup>Faculty of Psychological Science, Hiroshima International University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2006, Vol. 15 No. 1, 67-70

The purpose of this study was to construct a short form for young adults that measured their social phobic tendency and narcissistic personality in the two dimensional model. The scale consisted of ten items each for the two dimensions, which made it easy to classify them into personality subtypes. Analyses of the data from 305 students showed that the factor structure of the scale was sound, and that the two subscales had sufficiently high internal consistency. We would need next to study correlational data with other psychological scales.